

不登校事例へのスクールカウンセラーのコンサルテーション

高 橋 芙 美 子*

School Counselor's Consultation for Some Cases of Non-attendance
at School in Junior High School

Fumiko TAKAHASHI*

Key words : コンサルテーション consultation
 コラボレーション collaboration
 スクールカウンセラー school counselor
 アセスメント assessment
 不登校生徒 non-attending students

Abstract

The purpose of this study was to examine the significance of the school counselor's consultation for teachers and parents of the non-attending students.

The results of this study were as follows:

- (1) In order to support the non-attending students, it is important to collaborate with school counselor, the class teachers and other school staff.
- (2) It was suggested that the consultation for the class teachers and the parents were useful in making support plan and assessment of the students.

問題と目的

小中学校の不登校児童生徒の数は、文部科学省の調査によると、2008年、2009年にはわずかながら減少しているが、依然として増加傾向は続いており、小中学校でのスクールカウンセラー（以下SCと略記）が大きな役割を果たしている。その中のSCの役割の一つとしてのコンサルテーションについては、様々な視点から論じられている。学校でのコンサルテーションとは、SCが生徒への接し方に悩む教師の問題解決を援助することである。具体的には、①教師が生徒指導を進める上で役立つような助言をする（先生方のニーズを聞き、生徒への対応について共に考え、方向性を示す）。②基本的に組織の外にあって、学校側（教師）からの要請があって初めて成立する関係であ

る。そのためには、いつ、どのような場面でも相談をされるような信頼関係を日頃から築いておくことが必要である。③学校内での人間関係の調整役であり黒子的存在である。教師間、教師と生徒、教師と保護者との関係を円滑にするための様々な活動を行う。④多忙な教師に様々な提案をするのではなく、今まで行っている活動や関わり方でよい場合は、その活動を継続すること、少し改善した方がよいことは提言するなど、出来るだけ教師の負担にならないような対応を心がけることが大切である。谷島（2010）は、教師へのコンサルテーションを行うためには、目的と意義を周知させることや、啓蒙活動を通して役立つ情報を提供することが効果的だと述べている。また、張替（2008）は、「学校からの支援に対して消極的な保護者へは、つながりの仲介役として学校や関係機関と保護者との橋渡しをすることがSCの重要な役割となる」と述べている。文部科学省が

*東北女子大学

平成22年8月に実施した「指導の結果登校する、または出来るようになった児童生徒に効果があった学校の措置」として上位に上げているのは、1. 家庭訪問を行い学業や生活面での相談にのるなど様々な指導や援助を実施 2. 登校を促すため電話をかけたり迎えに行くなどした 3. 保護者の協力を求め家族関係や家庭生活の改善を図った 4. スクールカウンセラーなどが専門的に指導にあたった 5. 保健室など特別な場所に登校させて指導にあたったなどの項目である。このことから、学校側からの積極的なアプローチが不登校児童生徒の保護者から望まれていることがわかる。

伊藤(2009)(2010)は、「不登校傾向の生徒や保護者は、登校刺激をしたり、性急に登校を求められるのは辛いと考えている反面、家庭訪問や連絡もないと見捨てられたように思う、教師が相談に乗ってくれたり、別室登校などの措置をとってくれたことに対しては4割を超える保護者が評価をしている」と述べている。このような点からも、不登校傾向、不登校状態の児童生徒や保護者に対して学校側の配慮が求められると言えよう。以上のことを踏まえて、筆者が11年間(H.10年～H.21年)中学校のSCとして関わった数名の生徒の事例分析を通して、不登校傾向、不登校状態の生徒に関わる際の留意点や学校(学級)復帰に向けてどのような支援が必要かについて分析・考察する。特に、不登校状態の生徒や学級での適応が難しい生徒、校内での生活が困難になった生徒への対応について、SCとして実施した生徒や保護者への関わり方に対する教師へのコンサルテーションを中心に考察する。

2. 事例分析

いくつかの事例を支援内容別に、経過と対応及び留意点についてまとめた。

1. 学外機関も利用して担任と保護者、SCが連携をとりながら関わったケース

1. A男(中学2年)

A男は、小学校でも登校渋りがあり、中学入学

後登校出来ない状態になった。卒業時期までA男とは直接面接する機会はなかったが、母親との面接を継続、母親の不安を受け止め子どもへの関わり方についての確認や助言を行うなど間接的な支援を行った。A男は、初めは週1回、その後週4回、外部の教育機関を利用して学習、生活面の支援を受けた。母親は当初「センターに通って中学校復帰がないと進学に不利になるのではないか」「担任とは定期的な話し合いを続けたい」という希望を持っていたので、担任との連携をとりながらA男への対応を進めていった。母親との面接において、SCからは、A男の生活的自立の促進、自己決定、判断力の強化を目標として関わってもらえるように助言を行った。担任はA男との定期的面談や助言を行い、学外機関との連携も図りながら進路指導を継続的に行った。母親からは、「A男が自分の力で判断、行動出来るようになった。また、自分の意志も表現出来、積極的になったこと、トラブルにも対処出来る力もついてきた」と報告を受けた。このことから、A男が学外機関へ電車とバスを乗り継いで通うことで、時間管理や自主的に行動することが徐々に出来るようになり、その経験を通して、日常生活場面でも自立心や判断力が育ってきたことが伺える。また母親との面接や担任の話から、A男が他校の生徒との交流を通して社会的スキルも少しずつ身につけていったと考えられる。

2. B子(中学1年)

B子は、3世代家族の親子関係の問題や、対人不安がきっかけで、中学1年の夏休み頃から不登校状態になり、中学2年からは、中学校内での生活が困難になり、外部機関での支援を受けるようになった。SCは、本人と保護者との面接を実施し、担任とは生徒への対応についてコンサルテーションを継続した。その中で、別室登校から学外機関での生活に移行した時点で、担任へは、B子が学校に出向き、資料やプリントをもらうなど、出来るだけ中学校との関係を維持するような関わり方が望ましいのではないかと助言を行っ

た。このような経緯から、その後、B子は週1回位放課後に中学校に来て、クラス担任に進路について相談し情報提供を受け、高校受験に備えた。母親との面接では、家庭内の問題を中心に話を聴き、B子にどう対応していけばよいか助言を行った。B子との個別面接では、エゴグラムやSCTを実施し、自己分析させるなど自己肯定感を高めるための働きかけを行った。その後B子は高校に進学、大学に進学した。大学入学後、中学校のSC室を訪れた母娘から振り返りのコメントがあった。母親からは「不登校になった娘を通して親も変わった。あの時期は必要だったと思えるようになった」や、B子からは「不登校をしていた自分は何でも途中で投げだしていた過去を取り戻さなければ。今度はやりとげなければという思いがある」と決意が語られた。このように、不登校の子どもを受け入れる過程で、親自身が家族関係の再構築をしていき、それに伴ってB子の自己肯定感も徐々に高まっていったと言える。

以上の2例から、不登校状態の生徒や保護者に対して学外機関での学習、生活支援を進める際の留意点として、次のような点があげられる。

①学校側と密接な連携を図ることが重要である。事例A男、B子の場合、どちらも外部機関を利用しながら、在籍中学校の担任やSCとの連携も取りつつ進路や受験に向けた支援を続けることが有効だと考える。

②外部の機関を紹介したり、情報提供をする場合には、伊藤が指摘しているように、保護者が学校から見捨てられたという思いを持たないような配慮が求められる（インフォームド・コンセントの重要性）。また、生徒や保護者の要望に応じて情報提供をすることや、学校側も学外機関と連絡を取り合い、在籍している中学校との関係を密にするなどの対応が求められる。

③SCが保護者と面接したこと、親の気持ちや子どもへの関わり方の助言内容を出来るだけ正確に担任に伝えることも情報の共有、共通理解を図る上で大切である。特にA男の母親は、自分の子どもに対する関わり方を確認する目的でSCとの

面接を求めていたため、担任との連携を図りながら間接的な支援を継続した。このような関わり方が、一人子育てをしている母親の不安軽減、子育ての方針の確認につながったと考えられる。

II. 部分的登校、別室登校生徒の事例

1. SC室登校 C子（中学2年）

C子は、中学2年の3学期から、学級での友人とのトラブル、部活での人間関係がきっかけで不安感が強くなり登校困難になった。C子は保健室登校や別室登校ではなく、一気に教室に戻りたいという希望を持っていたので、4、5ヶ月間週1回SCとの面接と担任との話し合いを中心に、進路について考えたり、自分自身を見つめるなど学級復帰に向けて態勢を整えていった。SC室では、面接と並行して好きな詩を読んで色紙に書いたり、いくつかの心理テストやカウンセリングワークを体験する中で自己理解を深めていった。その過程で、C子はどういう状態になったら教室に戻れるか、時期とタイミングを見計らって、自分で心の準備を進め、中学3年の一学期終了前に学級に復帰した。このケースでは、担任へのコンサルテーションも重要で、「いつ、どのタイミングで学級へ戻れるか」「登校刺激をしてもよいのか、本人の心の成長をもう少し待った方がよいのか」などについて、緊密に連携を取りつつ対応した。最終的には、C子は中学3年の夏休み前に友だちからのメールにも返信したり、クラスの友だちにも連絡をとれるようになり、自分でクラスに戻る日程を考え、自分自身で決めた予定の日一気に学級復帰を果たした。その後、C子は保健室にもSC室にも相談のために訪れることはなく卒業した。

2. 部分的に別室で生活した3名の生徒

(D子、E子、F子) (中学1年)

家庭での親子関係、学級での人間関係のトラブルから、頭痛、腹痛などのストレスによる心身反応が現れた生徒たちが数名同時期に別室登校をしたケースについて述べる。学級以外の別室で感情

を自己コントロールしつつ、同じような悩みを抱えている生徒同士が相互に関わって、徐々に自分の気持ちを出し共感し合うことで、前向きに行動できるようになったと考えられる。この生徒たちの共通点としては、「自己肯定感の低さ」「家族内での存在感の薄さ」「親に認められたいという欲求が強い」「対人関係のストレスから心身反応が生じる」などがあげられた。友達との距離の取り方、相手への言葉づかいなど、友だちとのコミュニケーションがうまくとれず、トラブルになることが多かった。このようなことから、個人面接と並行して、グループワーク（アサーション・トレーニング、リフレーミングなど）や、エゴグラムなどの心理テストでの自己分析、他者理解を深める働きかけをした。3名は、2年生の進級時のクラス替えをきっかけに学級に復帰したが、時々体調を崩して保健室やSC室を利用しながら中学校生活を過ごした。特にD子は、ストレス反応も強くうつ症状を示したことから、担任とも「今子どもにとって何が大切か、健康面の改善が最優先ではないか」ということを確認し、担任とSCが同席して保護者にその旨を伝えた。その後、D子は医療ケアも受けながら学校生活を送り、高校受験に備えた。卒業後、D子から「時々調子は悪くなるけれど、何とか高校生活を過ごしている」という連絡を受けている。

以上の事例から、部分的に別室で過ごす生徒に関わる際の留意点として次の点があげられる。

(1) 心の安定を図るための居場所としての別室での過ごし方について管理職、担任、養護教諭、SC、事務職員が共通理解を図ることで、生徒たちへの一貫した関わり方が可能になる。

(2) 別室で過ごしたり、なかなか教室で授業を受けることが出来ない生徒に対しては、教師間で連携して学習支援を実施したり、進路についての情報提供をするなどの具体的な取り組みが必要だと考える。

(3) 親子関係、家庭内での人間関係のトラブルが関係している場合には、将来の自立に向けて進路や就職について考えさせたり、情報提供を行なう

ことも有効である。

(4) 対人不安、ストレスを抱えて学級に入れないう生徒には、人間関係を円滑にするための活動や、カウンセリングワーク（SST、アサーション・トレーニング）など自己肯定感を高めるための活動を個別面接と並行して実施することも必要である。

考察（事例分析を通して）

1. 学校場面での教師、保護者へのコンサルテーションの進め方について

生徒の心理状態についての適切な見立てと診断結果をどのように教師、保護者に伝えるかが大切である。そのためには、日頃から教師との話し合いを持ち情報を共有することが必要である。「その生徒にとって今どのようなアプローチが適切か」について、担任だけでは判断に迷う場合、SCとして面接を通して把握している生徒の様子についてアセスメントし、方向性を示すことが求められる。別室で過ごしたD子の場合、保護者（特に父親）への関わりが難しく、医療面にどのようにつなげていくかが課題だったが、教師とSCが連携をとって対応したことで状況が進展したことから、日頃からの情報交換とコンサルテーションが重要であると言える。

SC室登校をしたC子の場合、担任が生徒の心理面に配慮して、登校刺激の有無や時期についてSCと密に連絡をとりつつ進めたことが、本人の登校意欲や自己決定を促し、学級復帰への道筋につながったと考えられる。

2. 保護者と教師とのパイプ役としてのSCの役割

不登校状態の生徒の事例で述べたように、完全に登校出来なくなった場合、生徒の学習支援、進路指導の進め方など双方の考え方を聞き、調整する必要がある。学外の教育機関を利用しつつも、在籍学校とはつながりを持っていたいと考えている保護者のニーズを的確に学校側に伝え、担任との連携をしっかりとっていくことが望まれる。直接保護者が学校側に要望しにくいことを間接的に教師に伝えたり、教師の考え方を保護者に適確に

伝えることで双方の意志疎通が図られ、その結果、生徒への関わり方もスムーズになると考えられる。

3. 生徒の心のケアと並行して、別室登校生への学習支援も求められる。その際には、進路や将来の職業に結びつくように情報提供をもとに話し合うことで生徒が目的意識性を持ちやすく、学校生活の過ごし方に見通しを立てやすくなると考える。

4. 対人トラブルがきっかけで学級に入れなくなり、部分的に別室や相談室、保健室で過ごす生徒への対応については、学内の教職員との共通理解が必要である。また、自己肯定感の低い生徒に対しては、グループワークなどを継続的に実施することにより自己理解を深め、他者への共感も生じ、徐々にではあるが、自己を受け入れることが出来ていくと考える。

まとめ

中学生が学校生活に適応するためには、学校内、学級内での人間関係を調整し、トラブルを早期に発見し対応することが必要である。また、学級での生活が難しくなった生徒に対しては、初期の段階で担任へのコンサルテーションを行い、連携を取りつつ対応することが求められる。11年間のSC活動で関わった生徒の記録をまとめる中で、筆者が勤務した中学校では、管理職を始め教職員との連携がよく取れていたこと、担任や養護教諭、生徒指導担当の教師へのコンサルテーションもスムーズに行われていたことを改めて確認出来た。このことにより、生徒や保護者への関わり

方についての共通理解が得られ、問題解決に有効だったと考えられる。また、大規模校ほど、各部署の窓口となる教師との話し合いやコンサルテーションが継続的に行われることが重要であるといえる。

引用文献

- 張替裕子 (2008). スクールカウンセリングにおける家庭訪問を活用した不登校支援—「支援を求めない保護者」への支援という観点から
目白大学 心理学研究, 第4号 125-135.
- 伊藤美奈子 (2009). 不登校その心もようと支援の実際 金子書房 117-124.
- 伊藤美奈子 (2010). 教師・カウンセラー・保護者の協働による不登校への対応 教育と医学 慶應義塾大学出版会, 39-49.
- 諸富祥彦 (2004). 不登校とその親へのカウンセリング ぎょうせい 97-103.
- 谷島弘仁 (2010). 教師が学校コンサルタントに求める援助特性に関する検討 教育心理学研究, 58, 57-58.
- 文部科学省 (2009). 平成21年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」

謝辞

スクールカウンセリング活動で関わった中学校の生徒、保護者の方、連携をとって様々な支援をいただきました教職員の皆様に、心から感謝申し上げます。

平成23年11月17日